

5. 遺構復元工事区（庭園）

5-1. 主庭（池庭）

発掘調査報告書にあるように、庭園遺構は奥向きの御殿の御座之御間と御茶所（茶室・天光室）の前面（南東面）から、非常に残りのよい状態で検出された。この庭園は江戸時代後期に奥向御殿が改築されて、かつてこの場所にあった御守殿が取り除かれ御座之御間等が造営されたのと同時期に作られたものと考えられるが、その明確な年代はわからない。しかし直弼が2ヶ所の茶室（天光室と御休息所の閑適軒）を用いている記録があることから、その時代には最もよく整っていたと考えられる。

幸いなことに、この庭園の盛時を克明に描いた極彩色の古絵図があり、その姿は遺構ともよく合う。今回の復元整備は遺構に忠実に行なったことは勿論であるが、遺構からはわからない地上部の景観についてはすべてこの古絵図によるものである。以下、庭園の構成部分別に、整備の状況を述べておきたい。

(1) 園池

園池は南北約15m、東西幅は中央部で約4m、南部の広いところで5.5mあり、北部は約4.5mで、北部と南部がやや広い。水は北東部から入り、西南部を池尻としている。排水は池尻の石組の間をオーバーフローさせ、4.5mばかりを開渠で流し、その先は漆喰管の暗渠で溜枳に貯水し、溜枳から溢れた水は石や漆喰製の暗渠で内堀へ流出するようになっていた。

池の護岸は殆どが石組でめぐらされているが、西岸南部には乱杭（松杭が11本残存）、及び西岸北部に玉石敷州浜の部分があって変化をつけている。礼拝石もあり、池中の岩島も残っていた。

護岸石組は凡ねしっかりと据えられていて、明らかに池に転落していると判断されたのは僅か3個で、それらは傍らの岸に根石群があるので、容易に元の位置に戻すことができた。しかし古絵図にみられる東岸南部の立石群は背が高く、石も良かったと思われるので、この地が平らに整地されたとき持ち去られたのであろうか、この部分4.5m強の岸には庭石が全く失われていた。古絵図によるとこの辺りは庭園全体の中で一つの焦点となっており、大ぶりの立石による護岸も立派で、後ろの築山裾には枯滝様の石組があり、玉石敷の枯流れが描かれているので（遺構では流れの岸の石が2個残っていた）、ここには丹波から10個ばかりの景石（本梅産山石、最大のも2.5トン）を搬入し、古絵図に則って枯滝・枯流れ、並びに護岸の石組を整えた。流れには絵図にあるように五郎太石を漆喰打ちの地盤に敷き並べて固定した。その他の護岸石組について新しく入れた石は、木橋に近い西岸北部の1石だけである。

園池南部の2石よりなる岩島は、明らかに整地の際に転倒していたのでこれを立て直した。

乱杭護岸の部分は新しい松丸太（φ10cm、長さ85cm）で打ち直し、裏込めに粘土を詰めて突き固めた。

本園池で風変わりな手法を見せているのは北岸の州浜で、古絵図には3段に色違いの玉石（藍色の石2段、白い石1段）を並べた間に小石を敷いた姿が描かれている。他に例を見ない意匠で奇異な感じがするが、整備も絵図の通りに行なった。なお東岸北部（木橋の北）にも古絵図に玉石敷の部分があり、水草が植わっているが、ここは遺構でも護岸石がないので玉石による州浜を復元した。

池底は水洩れを防ぐため、整備に際しては底を砂利で突き固めた地業の上にポリエチレンフィルムを敷き詰め、その上に20cm厚さに粘土を置いて転圧し、さらに水が濁らないように砂利敷としてある。

(2) 遣水

古絵図によると庭園内東部に、別棟の数寄屋と待合腰掛のあったことがわかるが、遺構ではこの部分に2流れ

(西南側からの流れが途中で2股に分かれているので厳密には3流れになる)の漆喰で作った水路が検出されている。水路は池頭近くで合流し、護岸石組の間から池に注いでいた。この流れは、遠く油掛口付近の外堀の湧水池(現在の城東小学校裏手)に設けた元枿からの水筋(水道)で給水していたと考えられ、園池の当初の水源であった。

数寄屋がいつまであったかは不明であるが、次の時期には池頭が延びて、今回検出された本格的な遣水が設けられた。曲折する遣水遺構は長さ約13m、幅は1 mから2 mで、両岸共に石組を施しているが、東岸3 mほどに底から立ち上がらせた漆喰で岸とした部分がある。護岸石組はレベルが高かったためか、地均しの際に流路に転がして埋め立てたらしく、大ぶりの石が多数流れの中に落ちていた。幸い岸には元の据え跡がはっきりと残っていたので、ここに石を合わせて復元することができた。但し上流部分には、近年にごみ捨て場として深く掘り下げられた場所があり東岸3 m・西岸4 mがこわされていたので、この部分にのみ新しく護岸石組を行なった。底はすべて漆喰であるが破損が著しいので、漆喰護岸と共にすべて打ち直した。流れは玉石敷である。

遣水中3ヶ所に水落ちの段石があり、復元後は水道水による給水と池尻からの循環水によって、心地よい水音をたてるせせらぎとなった。当時は前述の元枿からの給水と考えられる。この遣水は古絵図にはない部分で、新たな発見である。

(3) 数寄屋跡地

上述の数寄屋の跡には茶室を再建する目処がたたないので、古絵図にあるように竹の垣根(大津垣)で囲んで、場所を示すにとどめた。

(4) 橋

園池には中央部に長い木橋(平らな板橋)と、池頭部分に石橋(1石の平橋)が架かっていたことが古絵図によってわかり、遺構の上でもこれらの橋の兩岸台石が確認された。木橋は絵図では1枚板を渡しているが、途中で支え(橋脚)がない長橋のため、復元橋では強度をもたせて、長さ4.25m・幅30cm・厚さ15cmの檜の芯持材を2枚並べて使用した。2枚の厚板は側面4ヶ所をφ12mmのボルトで締めつけて固定し、ボルトの頭は埋木でかくしてある。石橋も現物を失っているので、現場に合わせて長さ1.7m・幅65cm・厚さ20cmのものを調達した。幸いさびのついた古い石材を見つけることができ、古い石組とよく調和したと思われる。

(5) 築山

古絵図には池の背後に3個乃至4個と数えられる築山が、かなり誇張して描かれている。この部分には発掘によりマツの根株が数株出てきており、その根元の高さから築山の高さがわかる。いずれにせよ池と外周りの土塀との間隔からも、絵図のような高く大きい築山ではない。復元に当たっては場所に応じた盛土で、築山の起伏を表現した。また池の南西岸も古絵図にある築山になぞらえて低い野筋様の盛土を行ない、絵図にみられるように3石の石組を添えた。築山表面はすべて絵図のようにシバ地とした。

(6) 雪見燈籠

園池対岸中央部、木橋を渡った右手の岬状部分には、シダレザクラの下に4脚で中台・火袋・笠共に六角形の雪見燈籠があったことが絵図に示されており、遺構でもこの部分はたたき(三和土)となっていた。現物は失われているので、なるべく絵図の感じに近い形のものを探し求め、たたき部分に平天の台石を据えて燈籠を置いた。

(7) 縁先手水鉢

古絵図には御座之御間縁側南西端、御茶所に接するところに、大ぶりの自然石横長の手水鉢が台石上に載っているのが描かれている。いささか誇張した書き方であるが、これも現物はなくなっているので、長さ1.8m・幅1.

0m・高さ0.8mの自然石に水穴を加工したものを用いた。手水鉢には笕で水を注ぐが、鉢を溢れた水は、玉石敷の流れとなって池に入るようになっている。この部分は絵図では大きく破れていて玉石敷の一部しかわからないが、遺構で流れの地形が認められ水分けの低い景石も出てきて、このことが裏付けられた。鉢掛けの木として、絵図の通りウメの古木を添えた。

(8) 園路

園路は遺構としては木橋手前（建物側）の平天の台石に接する延段の五郎太石が6個残っていただけで、それ以外の痕跡は見当たらなかったが、霞零（あられこぼし）の延段・飛石・砂利道を古絵図にある通りの動線で復元整備した。飛石が比較的少なく、遣水の石橋と庭門（北庭境）を結ぶ延段途中から池辺へ飛石で下り、池頭の沢飛石を伝って対岸の砂利道に至る通路と、一つは御座之御間濡縁の木製階段から池際の札押石につながる飛石、もう一つは同じく階段下から露地の飛石に至る部分だけである。庭園は御座之御間からの鑑賞を主体としていることは勿論であるが、庭に降りて散策できるよう、園路にもきめのこまかいルートの設定が感じられる。

(9) 露地

御茶所（天光室）の前面には、四つ目垣と大津垣風の竹垣で囲まれた露地のしつらえがあったことが古絵図でわかるが、遺構としては残っていなかった。この部分も絵図が大きく破れているので全体は不明であるが、残存部分の蹲踞と飛石の描写を参考にして全体を整備した。材料はすべて新しく調達したものである。

(10) 植栽

植栽についても古絵図によってマツを主体に、サクラ・シダレザクラ・ソテツ・ウメなどの高木や、サツキ・ツゲ等の低木刈込の植わっていた状態がよくわかる。特にシダレザクラの高木とソテツの大株が目をひく。よってこれらを吟味選定して配植した。露地を含めて用いた樹種は次の通りである（括弧内本数、数字のないものは1本）

高木……クロマツ(7)・モツコク(10)・シダレザクラ・ソテツ・ウメ(2)・カエデ(3)・モクセイ(8)・サザンカ(2)・マキ(3)・モチ(2)・ツゲ・ヤマザクラ・カナメモチ・カクレミノ・ハナズオウ
低木……ヤマブキ・ドウダンツツジ(2)・ヒサカキ(4㎡)・ムラサキシキブ・ヒラドツツジ(10㎡)・サツキ(8㎡)・ツゲ玉物(14)

以上、発掘遺構と古絵図から復元整備した庭園の姿は、見るほどに盛沢山な要素によって構成され、細部的にも変化に富み、頗る技巧的といえる。全体の感じが文政11年(1828)に籬島軒秋里が著わした「築山庭造伝後編」の上巻に図示してある“真之築山之全図”とよく似ており、江戸時代後期に定型化した作庭を思わせる。藩主居住の御殿として、ここでは賑やかな景観に目をたのしませるようにしたのであろう。

5—2. 北庭（枯山水）

御座之御間から高御廊下によって奥座敷・御亭と連なる御殿の北側（正確には北東側）の広場には、御亭の方に寄って低い野筋風築山に11個の景石を配した枯山水の庭を設けた。この部分の庭園を描いた古絵図もあるが、全く遺構が残らず、庭石もなく、土堀の位置（線）も絵図の時代とは変わっているので遺構復元は出来ず、従って全く新しい作庭である。しかし雰囲気としては、絵図のあっさりとした空間構成に準じている。盛土部分は芝地とし、景石には三重県鈴鹿山系御在所山の丸味のある穏やかな感じの石を用いた。平地の広場は砂利敷で、全体として次の樹種を植栽した。

高木……ウメ(6)・モクセイ(4)・マツ(3)・ヤマザクラ(3)・マキ(2)・カエデ(2)・アラカシ(2)

・カナメモチ(3)・モチ(2)・モツコク・サンシュユ・カクレミノ・クロガネモチ
低木……ナンテン(8)・サツキ(3㎡)・ヒラドツツジ(2㎡)・シモツケ

5-3. 坪庭の漆喰池

多くの棟が縦横に連なる表御殿には、当然のことながらいくつもの坪庭ができるが、うち3ヶ所から漆喰でつくった小さい池が発掘された。その一つを御座之間(奥座敷)前に復元した。長さ3.7m、幅は最も広いところが1.6mで中央部でくびれており、そこに2個のまん丸い小島(直径50cm)が沢飛び風に並び、最も深い所(水深40cm)に甕が埋まっていた。給排水の小穴があいていて、竹樋が見付かっている。絵図によると周りにはサクラやモモが植えられていた。復元池は遺構を埋め戻して保護した上に同じ形状寸法のもを新らしく作ったものである。

ほかの2例は、御客座敷と局との間の坪庭、及び御客座敷と高御廊下などに囲まれた坪庭から検出された。前者は残りの状態がわるかったが、絵図では池の周りに6個の景石があり、池上には藤棚が設けられていた。後者の坪庭には3個の漆喰池が竹樋で互いにつながられ、前者共にいずれも中央部には甕が埋めてあった。絵図には池の周りにウメの木や草花が描かれている。このような坪庭の小さい漆喰池は市内の発掘調査で2例(西中学校の校舎改築)、現存する武家屋敷で1例が報告されている。当地に独特の漆喰細工の一つとして興味深い。